

中国庭園の初期的風格と日本古代庭園

田中 淡

(京都大学人文科学研究所教授)

1. 中国庭園の濫觴と不老長生の理想郷

中国における苑園(大規模自然庭園)は四季の皇帝田獵儀礼に端緒が求められるが、実際人工的造園の濫觴は秦始皇帝と漢武帝の離宮において顕著に現れる。『史記正義』秦始皇本紀31年(前226)に引く『秦記』に、現在の咸陽にあった蘭池宮について記し、

始皇帝は長安に都をつくった。渭水の水を引いて池をつくり、蓬萊、瀛洲の築山をきずいた。遺址を彫って鯨をつくり、その長さは200丈であった。

という。不老長生を追究しつづけた始皇帝が来世永久の理想世界を現出しようとした庭園にほかならない。これは、東海の神仙が棲むという神山を苑池に造営した文献上の初見であると同時に、原文に「築為」とあることから、それが紛れもなく版築の工法で築かれた、後世にいわれる「假山」の明確な祖形でもある。

次いで、前漢の武帝が秦の旧苑址を拡張整備を加えた上林苑は文献的に知られる最初の本格的な人工的景観の造営をともしなう苑園であって、その中の建章宮について、『史記』封禅書に、

そこで建章宮をつくった。その規模は千門萬戸に及び、前殿は未央宮よりも高かった。……高さ20丈あまりの漸台を設け、この池を太液池と呼んだ。池中に蓬萊・方丈・瀛洲・壺梁の諸島があつて、海中の亀魚に擬えている。

とあり、これらの神山が池中の中島として築かれたことが明確に知られる。武帝もまた周知のように神仙思想に傾倒し、元鼎2年(前115)方士の少翁と

公孫卿の「仙人は楼居を好む」という進言にもとづいて柏梁台を築いて、台上に巨大銅人像を建てて仙人掌で甘露を受け、玉屑を混ぜて不老長寿の仙薬として服した。太初元年(前104)に柏梁台が焼失するやいなや建章宮に神明台と井幹楼という高台高樓を造営したのも武帝の仙境への憧憬の明白な証しである。注意すべきことは、秦始皇帝にはじまり漢武帝に集約される東海神山の理想郷をかたどった苑池の中島を配するレイアウトが中国庭園の濫觴と重なるという事実である。神仙の苑池と言うべき初期庭園の構成は、その後も北魏の洛陽華林園、隋の洛陽西苑、唐の長安大明宮太液池へといたる歴代皇帝の苑園に、かたちを変えこそすれ踏襲された。近年一部の発掘調査がおこなわれている大明宮太液池は現代にいたるまで窪地として、中島の蓬萊山は高まりとして地上に痕跡をとどめているとおりである。

北魏洛陽華林園について、『洛陽伽藍記』に、

華林園の中に大きい池があり、これは漢(魏の誤り)のときの天淵池である。池中にまた[曹魏の]文帝の九華台がある。高祖はこの台上に清涼殿を造った。世宗は海内に蓬萊山を作った。山上に僊人館があり、上に釣台殿があり、いずれも虹蜺閣のつくりで、虚に乗じて(空中を歩いて)往来することができた。三月上巳の禊日や季秋巳辰の日には、皇帝が龍舟鷁首に乗って、その池上に遊んだ。

と記すのもその例証である。虹蜺閣のつくりというのは、『水経注』にも、

遊覧する人びとが阿閣を昇り降りすると、虹の階を出たり入ったりして、その様子はちょうど

鳧が沈んだり鸞が飛び立つようにみえた。

とあるが、虹はしばしば橋の比喩とされるように、池中の中島の蓬萊山に立つ僊人館と釣台殿の両閣が高く架けられた空中廊のつくりであったことを描写したものにはちがいない。実例をあげれば、下華嚴寺薄迦教藏(山西大同、遼・重熙7年[984])、二仙觀大殿道帳(山西高平、北宋・紹聖4年[1097])など、あるいは敦煌莫高窟壁画に描写される類型をもって想像することができる。この種の空中楼阁は、北宋・元符3年(1100)に編修された官撰建築書『營造法式』小木作制度にはいみじくも「天宮楼阁仏道帳」として記載されるように、本来、仏教・道教の別に拘泥すべき類型ではなく、昇仙する理想郷の建築世界を現出したものにほかならない。

敦煌壁画の中には「浄土変」と呼ばれる題材がある。こうした壁画は、人々が憧れる西方浄土の美しい有り様を描いている。それら浄土世界を描いた絵の中では、通常は建築物を取り囲んでいる蓮池に大きな平台があって、その上で仏・菩薩たちが厳かに座り、伎楽天(音楽の神)や飛天(空を飛ぶ神)たちも美しい姿や踊りを見せている。「こうした建築物と水面の配置方式が中国の伝統的な庭園の発展とどのような関係にあるのか」、および「それが庭園や寺院の完成された配置方式なのか」という点は研究に値する課題であろう。

2. 自然風景庭園の初期的風格

秦漢以来の中国早期庭園は、上述したような皇帝苑囿だけでなく、本来、広々とした苑池の水面や水流を主要な構成要素とするところから出発した。前漢長安に梁孝王劉武が築いた兔園は、『西京雜記』に、梁孝王は宮室・苑囿をつくるのを楽しみにしていた。曜華之宮をつくり、兔園を築いた。園内には百霊山があり、山には膚寸石、落巖石、棲龍岫があった。また、鴈池があり、池の間々には鶴洲、鳧渚があった。多くの宮觀はたがいに連なり、数十里にわたってめぐらされていた。

珍奇な果樹や木々、珍鳥や怪獣がことごとく備わっていた。王は毎日、宮人や賓客と一緒に園内で弋射や魚釣りをした。

という。名称から推測する限り、主要な景観として自然の秘境を模した巖、谷、洞が配され、苑池に鶴や水鳥をかたどった洲浜が造成されたい。『三輔黄図』によると、

茂陵の富民袁広漢は、巨万の錢を藏し、……北山に東西四里、南北五里の庭園を築いた。川の流れを遮って園内に注ぎ入れ、石を積んで築山をつくり、その高さは10丈あまりで、数里にわたって連なっていた。白い鸚鵡や紫の鴛、犂牛、青い兕を飼い、珍しい獣や鳥がその間に蓄えられていた。砂を積んで中洲をつくり、流水を衝くきあたらせて波濤をつくりだした。川や海の水鳥を養って繁殖させ、雛が林や池に満ちあふれた。珍しい樹木や草の栽培していないものはない。建物はすべてめぐり連なり、重層の楼阁や長い歩廊は1日かかっても全部回りきれないほどである。

と。また庭づくりマニアで知られた後漢の梁冀は、『後漢書』の列伝によると、

また高大な庭園をつくった。土を集めて築山をきずき、10里の距離に9つの丘があって、二嶠山(洛寧の山)をかたどった。奥深い山や険しい溪谷は、あたかも自然そのままのようだった。飼いならされた珍獣がその間を飛び跳ねていた。

という。これら最初期の庭園の事例によると、土や石の築山をきずき、池を開き、池岸を設営するという中国庭園の基本的要素が備わると同時に、原文に「沙を積みて洲浜を為り、水を激いて波濤を為り」、「自然の若き有り」と、自然を模倣、再現するという造園の基本原則が看取される。魏晉南北朝時代を経て、造園景象の重点は苑池から築山へと変容をとげたようであるが、いずれにしても自然風景を模した景象が造園の主たる構成要素とされたのは、今日私たちが蘇州や無錫など江南地方に分布する明清時代

以降の遺構から得られる中国庭園の風格とはあまりにも乖離が大きい。

中国では庭園の発掘調査の事例はながいあいだ皆無に等しかったが、最近ようやくわずかながら発掘調査の報告がいくつか現れてきた。広東広州の秦漢時代と推定される南越王国の宮苑遺址からは苑池の広大な水面を主要な要素とし、池中に縁を束立てて張り出した干闌(高床)式構造と推定される宮殿遺構とともに、水流を屈曲させて配した日本の古代庭園の造園手法と酷似する庭園遺構が検出されたことは、日本の造園史学界では何故か無視されつづけているが、もっと注意を惹いて当然である。それは、私が約20年前に予測したとおり、中国庭園の初期的風格は、むしろ日本古代庭園の要素と著しく近似した風格のものだったのであろうとする仮説の正確さを実証することになった。

唐洛陽城郊の離宮上陽宮の遺址が近年発掘調査され、そのごく一部ではあるが、東西に細長い苑池の南岸から、東西に塼敷き基壇に立つ回廊と、その中間に池中に木造の土台と束建ての縁を張り出す水榭の遺構とともに、玉石鋪き洲浜をとまなう苑池と池中に立っていたらしい假山の遺構が検出されたこともまた重視されてよい。また、長安大明宮太液池の南岸で干闌(高床)式建築の長廊および大型の廊院建築遺構が検出されたのも、いまとなってはやはり宮苑との関連から改めて注目しなおさなければならない。というのは、すでに西安碑林(陝西省博物館)に蔵されていた唐長安城内の興慶宮を描いた宋代の石刻図に、龍池という苑池の南岸に沿って走る長廊の描写があることからみて、ちょうど北京西郊の清の頤和園に現存するのと同様な構成であろうことは推定ことができたし、私もすでにその事実を指摘していたからである。

宮苑や仏寺に限らず、早期の庭園では苑池、水面が重視された。唐の詩人白居易が長慶4年(824)から住んだ洛陽城内の履道里の邸宅につくった庭園は、かれの「池上篇」序に、

敷地は方17里で、建物が3分の1、水が5分の1、竹が9分の1を占め、そして島や樹、橋や道がその間にばらばらとあった。

という。庭園内には3つの島があって、西平橋と中高橋、つまり西寄り対岸は平橋、両島の間はアーチ橋でつないでいたとも記す。このように、現存する江南庭園の実例とはまったく異なり、水面が大きな比重を占めるものであったという推論を私はすでに1990年に前述と同じ論文のなかで発表した。その後わずか数年にして、果たして履道坊内の西北寄りの地で白居易の旧居が発掘され、南北両進からなる四合院と坊の西北両面を周る伊渠から水路を引いた、詩文に南園と詠まれた池にあたるとおもわれる遺址が確認されたのは、まさしくその推測が正しいことが立証されたのである。

敦煌莫高窟壁画の觀經變相図に描かれた仏寺の庭園は境内満面の水面に、ちょうど巖島神社社殿と同じように、木造の縁束を水中に林立させ、干闌式で舞台状の床を立ち上げる構造に描かれている。雲南昆明に現存する圓通寺の池苑を中心とする伽藍配置は、もともと私自身がかつて現地に残る元代の創修記を蒐集、記録して考証を加えたことから始めて内外に知られるようになった。現存する建築遺構は明代の再建ではあるが、池苑をとまなう配置は唐代にまでさかのぼる可能性があり、稀少ながら、その種の苑池伽藍が実在したことをしめす例証である。いまや広州南越王宮苑遺址、唐長安大明宮太液池遺址、洛陽上陽宮遺址が検出された以上、こうした広範な視点と研究方法がいつそう追求されなければならない。

3. 日本古代庭園にみる中国早期庭園の要素

日本の古代庭園は、上述のように辟易するほどの大量の文献史料と相反するほど歯がゆい遺構しかない中国庭園と比べて、発掘調査の事例ははるかにおいだけでなく、また造園手法にかんする情報も豊

富であり、そのなかにむしろ中国庭園ではつとに佚なわれた遺制が散見されることはじゅうぶん注意するに値しよう。

たとえば、築山は、中国では假山と称するが、冒頭に引いた秦の咸陽蘭池宮の版築、前漢梁孝王兔園の石山、後漢の梁冀の園苑には土山をはじめとして、早期の庭園からすでに不可欠な構成要素であった。中国では古代の遺構実例は確認できない一方、わが国の平城宮東院庭園遺址で発掘された假山の遺構はおそらくそのような中国古代の初期的風格を伝えるものとみてよいであろう。大明宮太液池の蓬萊山南岸で一部検出された石組と一部共通する因子がみられることもけっして偶然ではあるまい。

假山と関連の深い造景に、中国庭園では立峯とか特置石峯などと称する、太湖石などの奇岩怪石をオブジェのように屹立させる意匠がある。この種の造景は、一般にはその歴史的事実関係をほとんど検証されないまま中国庭園の象徴として印象づけられているようだが、それは正確ではない。すでに南朝・梁の華林園で用いられたのを嚆矢とするが、石癖(蒐石マニア)は唐の牛僧孺、李德裕や白居易の当時にピークを迎える古い伝統をもつものである。北宋徽宗による艮嶽の造営を契機としていよいよ白熱し、さらに専門化する経緯をたどった。太湖石の細かい空洞を多く開けた奇怪な形象の立峯は、さらに後の明清時代に定着した伝統にすぎず、北宋までの石峯ははるかに素朴で豪放な形象を特徴としていた。岩手県平泉の毛越寺庭園大泉池の水中に屹立する立石は、前掲の記述にならえばもちろん石の築山に属するけれども、同時に、立峯の初期的風格をしめすものとみてよい。立峯は、また盆景・盆石と深い関連をもつ。正倉院御物の古木でつくった假山は、毛越寺に伝わる鉄樹とともに、盆景の原型をしめすと同時に、造景要素の初期形態をしめすミニチュアでもある。

また、遣水は、平安時代に橘俊綱が撰した造園秘伝書である『作庭記』に記述があり、平泉毛越寺大泉

池の発掘調査でその記載とぴったり合致する自然地形を活かした水流遺構が検出されてから具体的形態がいっそう明確になったけれども、もともとは晋の王羲之が蘭亭で開いた流觴曲水の話に由来する。先に引いた『洛陽伽藍記』に、華林園で皇帝が龍舟鷁首に乗る園遊が記されるのはそれにもとづくものであり、華林園のなかには三国時代、魏明帝の造営にかかると伝えられる流觴池という名の池もあった。ちなみに、龍舟鷁首の式典はかつて平等院鳳凰堂や毛越寺庭園にも伝えられた。曲水の宴は、平城京宮跡庭園において微妙な水流勾配を制御するS字型に屈曲した苑池が発掘されたことから知られるように、すくなくとも初期には自然風景をたたえた装置であったと推測される。隋の煬帝が大業元年(605)に造営したという洛陽城郊の西苑には、16の院を周る龍麟渠があったというのは、自然風景の造景でおこなわれた初期の流觴曲水の形態を伝えるものである。ただし、煬帝が同年に築いた離宮の都梁宮には流杯殿という名の建物があったから、すでにこの儀礼に専用の建物も早くからつくられていたことが知られる。韓国慶州の鮑石亭には石に溝を穿った流杯渠がのこり、中国でも同様に、河南開封の流杯渠遺址のほか、現存遺構としては、北京紫禁城寧壽宮花園の禊賞亭の屋内に石に穿たれた流杯渠がある。北宋の建築書『營造法式』石作制度には「風字」「國字」2種の流盃渠が掲載されているように、流觴曲水に専用の流杯殿(亭)がつくられるのが早くから通例となったことは疑いない。

毛越寺大泉池に代表される日本古代庭園遺構の水面を主要な構成要素とする造景は、白水阿弥陀堂庭園、称名寺庭園、鎌倉二階大堂などの遺址とともに(一般に浸透した「浄土庭園」という呼称は誤解を招く源であるが)、すでに述べたように、中国庭園の初期的風格を伝えるものにほかならない。石敷きの洲浜の手法もまた前述したように、むしろ漢代の造景に近い。前述した遣水だけでなく、観自在王院庭

園遺址の瀑布は『作庭記』にいう池の類型のうち「伝い落ち」にあたる早期の実例である。

もとより『作庭記』には、中国の造園手法から直接影響されたと考えられる内容が少なからず含まれている。たとえば、方位の禁忌に関連して、東北は鬼門であるが、阿弥陀三尊石を迎え立てれば魔縁の侵入を妨げることができるというのはその典型である。門の中央に木があると「閑」字になるから訪問する人もなく家は閑散となる、庭の中央に木があると「困」字になるから家運は困窮する、などの記載と同様に、中国の風水・関係分野の専門方術書の影響であることは歴然としている。『作庭記』には「宅経に云」ではじまる箇条がある。現存する『黄帝宅経』は、清代に編纂された晩期の風水方術書であって、これとは関係ないが、同類の一群の風水方術書のなかには西晋や南朝・宋の編纂とする書物も伝わる。「宅経」を書名に冠する書物やそれと酷似すると推定される書物がすでに散佚した書物にあったことは『隋書』経籍志、『唐書』芸文志や『旧唐書』呂才伝の記述によって確認できる。同書か、あるいは同類の古典からの佚文の引用ではないかと推定される。つまり、『作庭記』の記載と合致する造園の要素が伝わる事実は、とうてい日本の庭園史や仏教史、政治史の範疇にのみ限定して解釈できる主題ではない。そうした数多くの造園手法の例証によって、はじめて中国古代庭園の佚われた初期的風格の遺制が知られる点にこそ毛越寺庭園に代表される庭園遺跡が有する真の価値を伝えらるゝといつていい。

註

- 1) 『史記』秦始皇本紀31年12月。張守節『史記正義』「秦記云。始皇都長安。引渭水為池。築為蓬、瀛。刻石為鯨。長二百丈」。
- 2) 『史記』封禪書「於是作建章宮。度為千門萬戶。前殿度高未央。……漸臺高二十餘丈。命曰太液池。中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁。像海中神山龜魚之屬」。
- 3) 田中淡1990a、1997。
- 4) 『洛陽伽藍記』卷1城内「華林園中有大海。即漢(魏)天淵池。池中猶文帝九華臺。高祖於臺上造清涼殿。世宗在海內作蓬萊山。山上有僊人館。上有釣臺殿。並作虹蜺閣。乘虛來往。至於三月禊日、季秋巳辰。皇帝駕龍舟鷁首。遊於其上」。
- 5) 『水經注』穀水「遊觀者升降阿閣。出入虹陞。望之狀鳬沒鸞拳矣」。
- 6) 田中淡1988、1990b、1990c、1992。
- 7) 『西京雜記』卷2「梁孝王好營宮室苑囿之樂。作曜華之宮。築兔園。園內有百靈山。山有膚寸石、落猿巖、棲龍岫。又有鴈池。池間有鶴洲、鳬渚。其諸宮觀相連。延亘數十里。奇果異樹。瑰禽怪獸畢備。王日與宮人賓客弋釣其中」。
- 8) 『三輔黃圖』卷4「茂陵富民袁廣漢。藏鏹鉅萬。家僮八九百人。於北[邙]山下築園。東西四里。南北五里。激流水於注其中。構石為山。高十餘丈。連延數里。養白鸚鵡、紫鸞、犛牛、青兕。奇獸珍禽。委積其間。積沙委洲渚。激水為波濤。致江鷗海鶴孕雛產鷄。延滿林池。奇樹異草。靡不培植」。
- 9) 『後漢書』列傳24梁冀傳「冀乃大起第舍。……又廣開園囿。採土築山。十里九坂。以像二嶠。深林絕澗。有若自然。奇禽馴獸。飛走其間」。
- 10) 田中淡1998a、2002a、2002b。
- 11) 楊鴻勛2001。
- 12) 田中淡1990a、1997。
- 13) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1998。
- 14) 中国社会科学院考古研究所等2003a、2003b、2004。
- 15) 田中淡1998b。
- 16) 白居易「池上篇」序(『旧唐書』卷166白居易傳)「即白氏叟樂天退老之地。地方十七畝。屋宇三之一。水五之一。

竹九之一。而島樹橋道間之」。

- 17) 田中淡1990a、1997。
- 18) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1994。
- 19) 蕭默1989。
- 20) 田中淡1983a、1995。
- 21) 田中淡1990、1997、1994。
- 22) TANAKA 1992。
- 23) 田中淡等2003。
- 24) 田中淡1978、1989。
- 25) 田中淡等2003。
- 26) TANAKA 1992。
- 27) 森蘊1962。田中淡1988。
- 28) TANAKA 1992。
- 29) 森蘊1986。
- 30) 田中淡1983b。
- 31) LEDDEROSE 1983。

参考文献

- 1) 田中淡1983a 「昆明圓通寺の碑文と建築・池苑」、『佛教藝術』151号、毎日新聞社。
- 2) 田中淡1983b 「生と死の原理」、上田篤・多田道太郎・中岡義介編『空間の原型』、筑摩書房。
- 3) 田中淡1978 「隋朝建築家の設計と考証」、山田慶兒編『中国の科学と科学者』、京都大学人文科学研究所。
- 4) 田中淡1988 「中国建築、庭園と鳳凰堂—天宮樓閣、神仙の苑池」、『平等院大観 1 建築』、岩波書店。
- 5) 田中淡1989 『中国建築史の研究』、弘文堂。
- 6) 田中淡1990a 「中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構」、『東方学報』京都第62冊、京都大学人文科学研究所。
- 7) 田中淡1990b 「中国建築、庭園与鳳凰堂(1)」、『古建園林技術』総第28期。
- 8) 田中淡1990c 「中国建築、庭園与鳳凰堂(2)」、『古建園林技術』総第28期。
- 9) TANAKA,Tan 1992 “Early Horticultural Treatises and Pure Land Buddhist Garden: Sakuteiki and Its Background in Ancint Japan and China”, Garden History-Issues, Approaches Methods, John Dixon Hunt (ed.) ,Dumbarton Oaks, Washington D.C.
- 10) 田中淡1992 「敦煌壁画中の建築、庭園与日本鳳凰堂」、蕭默編『敦煌建築』、新疆新華書店、烏魯木齊。
- 11) 田中淡1994 「『園冶』の世界—明末の造園論」、『しにか』1994年2月号、大修館書店。
- 12) 田中淡1995 「昆明圓通寺的碑文與其建築及池苑」、『空間雜誌』第67期、空間雜誌社、台北。
- 13) 田中淡1997 「中国早期園林風格與江南園林実例」、『城市與設計』第1期、唐山出版社、台北。
- 14) 田中淡1998a 「中国園林在日本」、『文史知識』1988年第11期。
- 15) 田中淡1998b 「清代の建築と離宮・苑囿」、『世界美術大全集東洋編 9 清』、小学館。
- 16) 田中淡2001 「中国建築の知識は如何なる媒体を通じて日本に伝えられたか—工匠、模型・図面、そして書籍」『考古学の学際的研究—濱田青陵賞受賞者記念論文

集Ⅰ』、昭和堂。

- 17) 田中淡2002a 「中国園林在日本」、蔡毅編訳『中国伝統文化在日本』、中華書局、北京。田中淡2002b 「日本における中国庭園」、蔡毅編『日本における中国文化』、勉誠出版。
- 18) 田中淡2002c 『中国建築知識東傳日本の媒介』（『東北亜研究論文系列(APARP)』16)、中央研究院 亜太研究計画、台北。
- 19) 田中淡・外村中・福田美穂共編2003 『中国古代造園史料集成—増補哲匠録—山篇 秦漢-六朝』
- 20) LEDDEROSE, Lothar 1983 “The Earthly Paradise: Religious Elements in Chinese Landscape Art” , Theories of the Arts in China, Susan Bush and Christian Murck (ed.) ,Princeton University Press.
- 21) 森蘊1962 『寝殿造系庭園の立地的考察』（『奈良国立文化財研究所学報』第13冊）、奈良国立文化財研究所。
- 22) 森蘊1986 『「作庭記」の世界』、日本放送出版協会。
- 23) 楊鴻勛2001 『宮殿考古通論』、紫禁城出版社、北京。
- 24) 蕭默1989 『敦煌建築研究』、文物出版社、北京。
- 25) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1994 「洛陽唐都履道坊白居易故居發掘簡報」『考古』1994年第8期。
- 26) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊1998 「洛陽唐東都上陽宮園林遺址發掘簡報」『考古』1998年第2期。
- 27) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人奈良文化財研究所聯合考古隊2003a 「唐長安城太液池遺址考古新収獲」『考古』2003年第11期。
- 28) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人奈良文化財研究所聯合考古隊2003b 「唐長安城太液池遺址發掘簡報」『考古』2003年第11期。
- 29) 中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人奈良文化財研究所聯合考古隊2004 「西安唐太液池南岸遺址發現大型邸院建築遺存」『考古』2004年第9期。



圖-1 下華嚴寺薄迦教藏・天宮樓閣

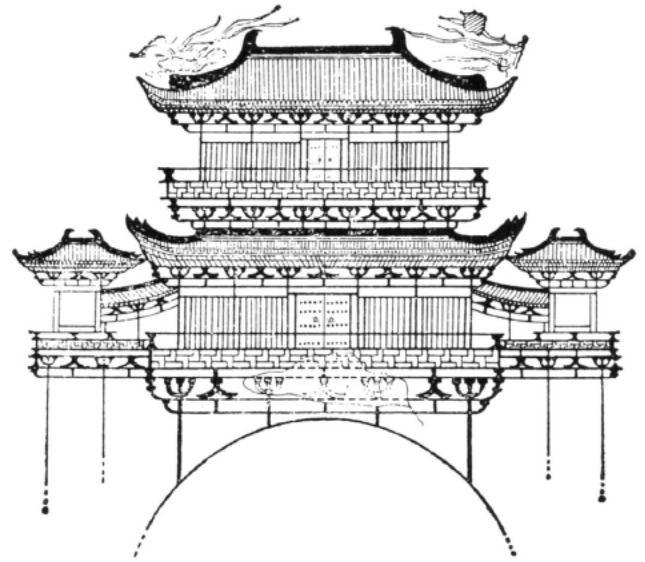


圖-3 李壽墓壁画樓閣圖

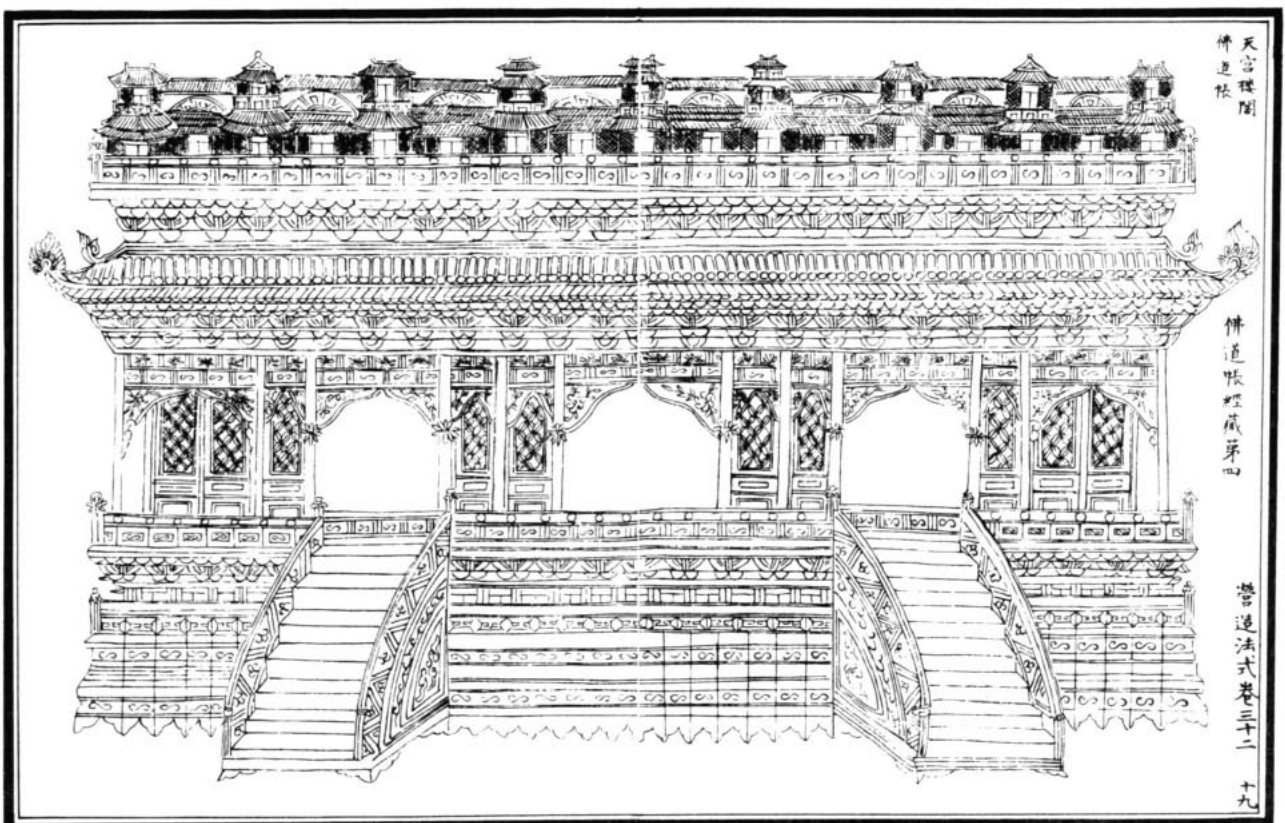
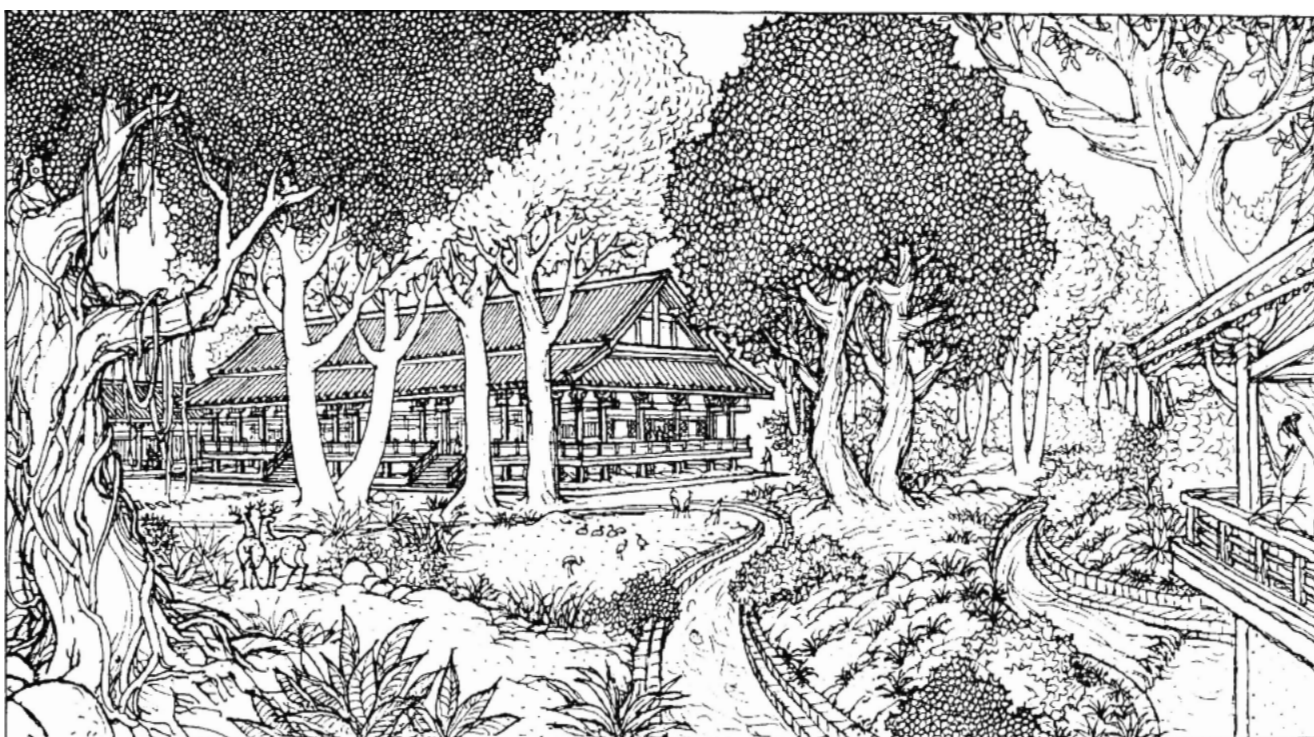
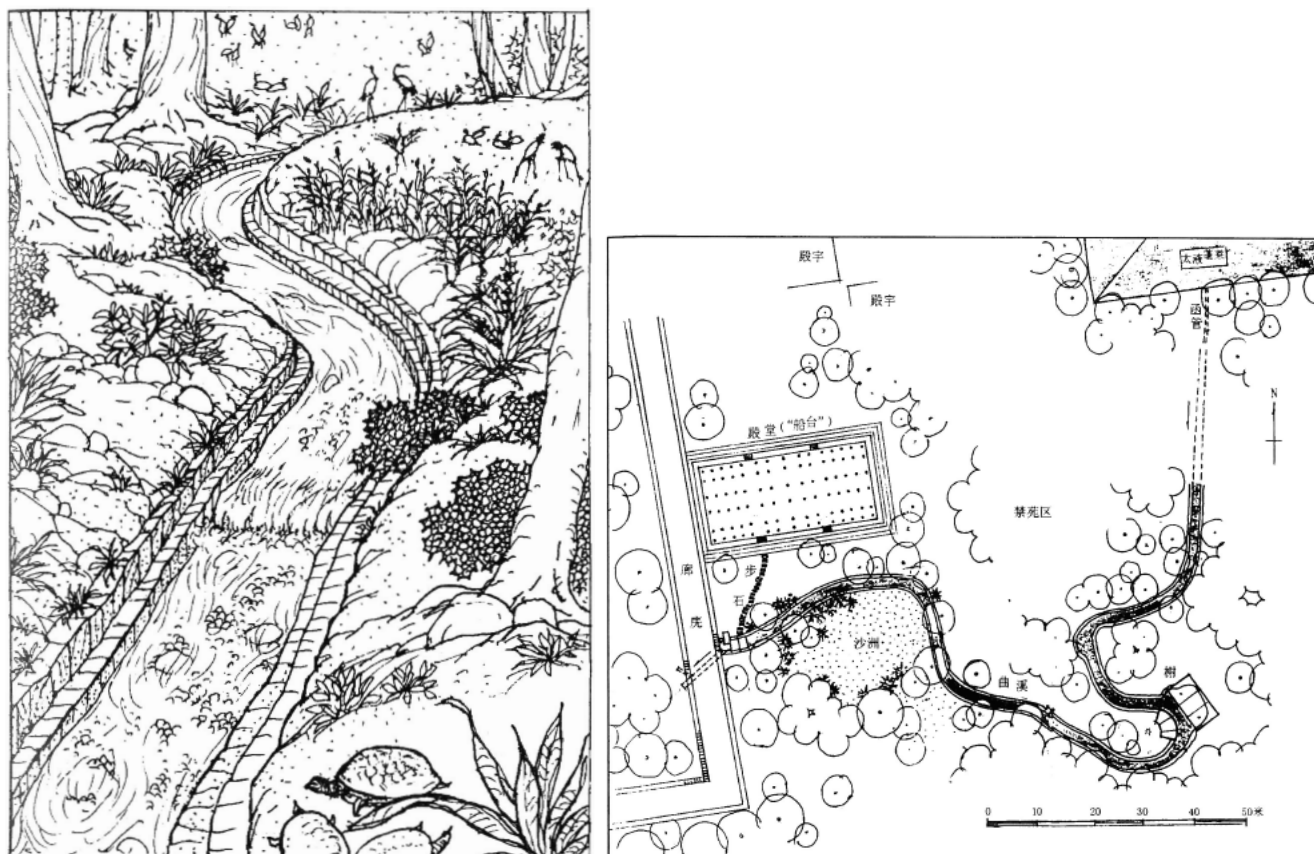
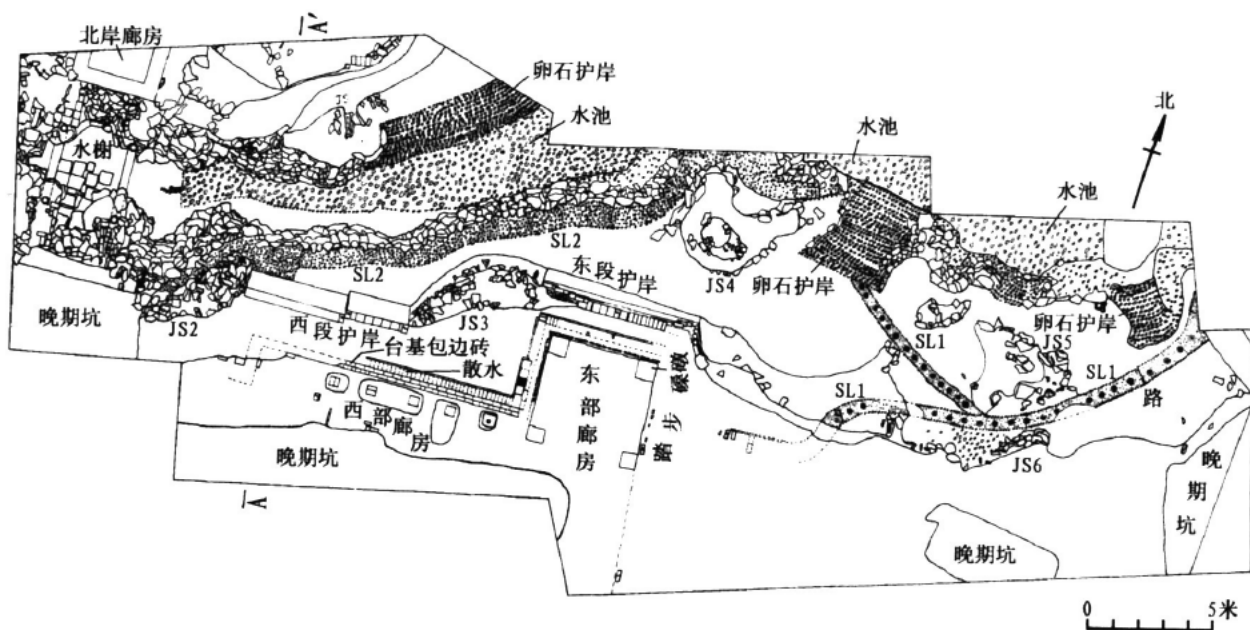


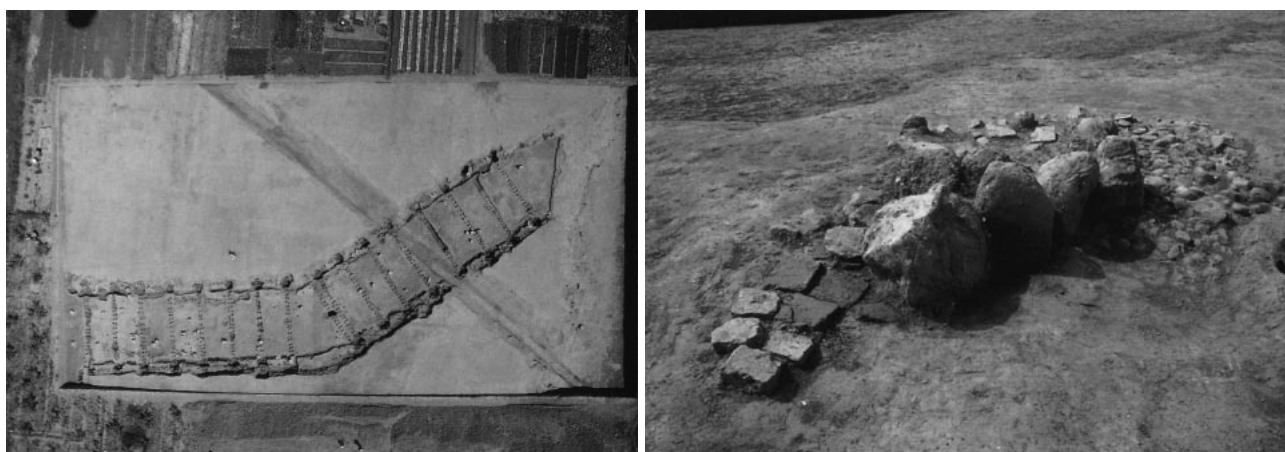
圖-2 『營造法式』天宮樓閣



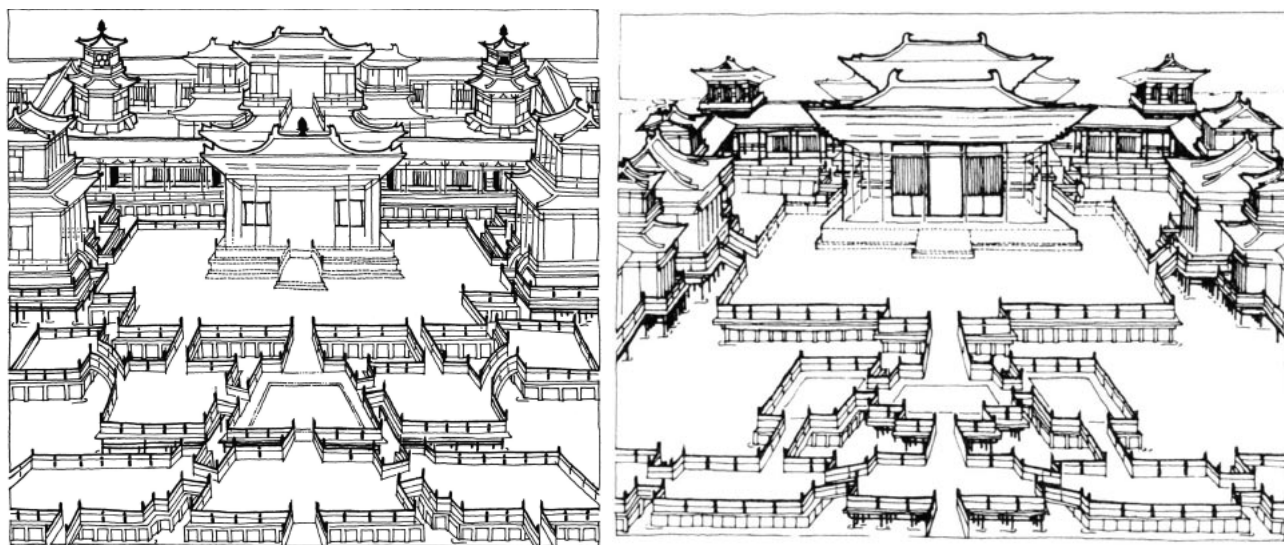
図－4 秦漢南越王宮苑遺址(広東州広州市) 遣水州浜 平面図と復元図[楊 鴻勳]



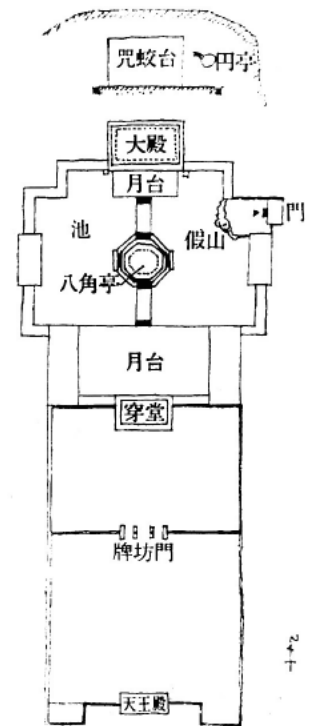
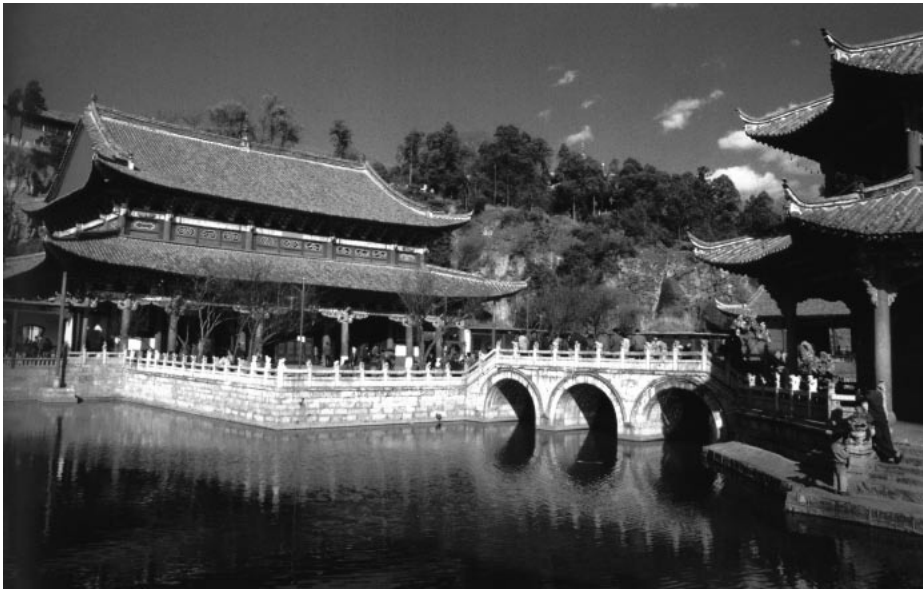
图—5 唐 洛陽上陽宮 園林遺址平面图



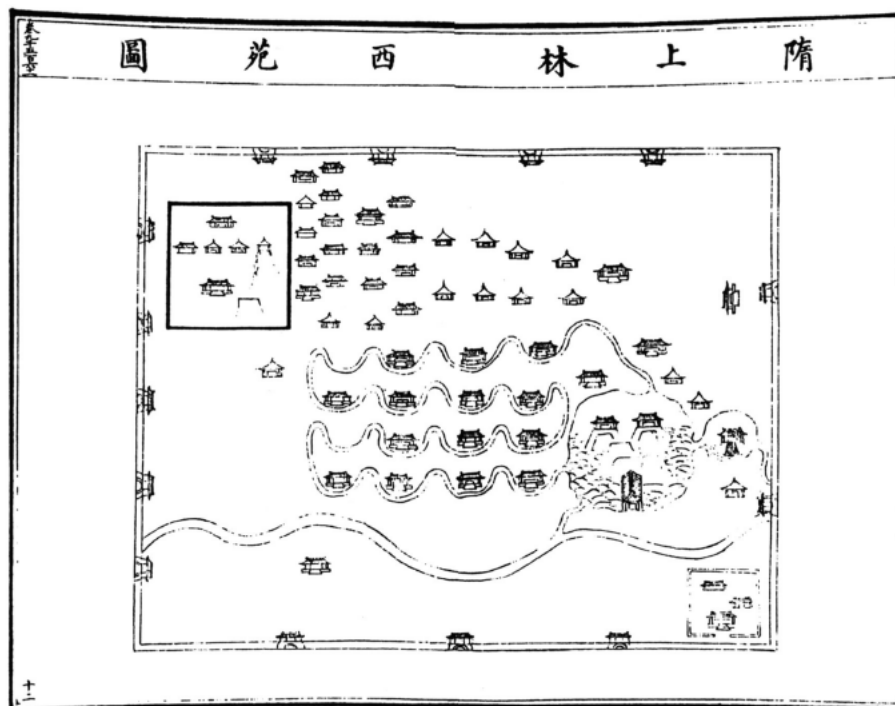
图—6 唐 大明宮太液池[左上：北岸「干闥」建築址，右下：蓬萊島南岸景石群(假山)]



图—7 敦煌莫高窟
[左图：第 85 窟北壁壁画 藥師經變の佛寺，右图：第 172 窟 觀經變相图]



図一8 圓通寺〔明・成化年間（1465－1487）〕
上図：池苑 正殿（左）と八角亭（右） 右図：伽藍主要部配置略図



図一9 隋東都西苑（永樂大典）

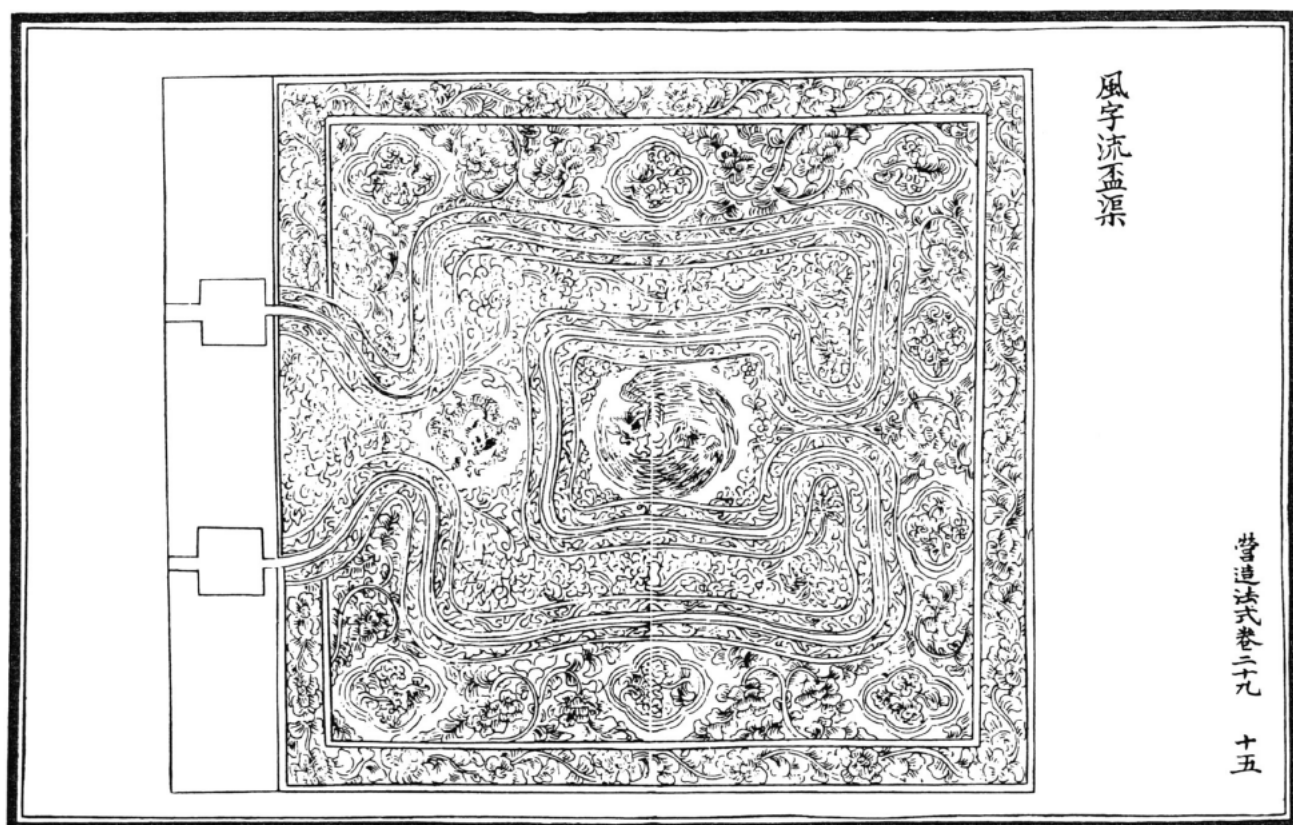


图-10 『营造法式』風字渠



图-11 鮑石亭（韩国・慶州）